

氏名(本籍)	甲斐あかり(宮崎県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第5984号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	Effects of Retelling on Japanese EFL Learners' Reading Comprehension (日本人EFL学習者の英文読解に再話を与える効果)
主査	筑波大学教授 博士(言語学) 卯城祐司
副査	筑波大学教授 磐崎弘貞
副査	筑波大学教授 Ed.D.(教育学) 平井明代
副査	神田外語大学大学院言語科学研究科教授 Ph.D.(教育学) 堀場裕紀江

論文の内容の要旨

本論文は、日本人英語学習者を対象に再話課題が読解をどのように促進するのか、そのメカニズムを解明するとともに、再話で産出される情報を検証し、再話課題の性質を明らかにすることを目的としている。再話とは文章を読んだ後にその内容を人に語る言語活動である。この活動は、学習者に対してテキスト内容や構造の想起、主要な情報や詳細情報の把握、意図的な読解ストラテジーの選択などを求め、円滑な読解処理を促進することができる。また、再話を行うことによって、学習者がどのようなテキスト理解を行っているかを教師側が知ることができることから、読解の指導ツールとしても海外においては幅広く受け入れられている。このように再話課題は読解における有益性が報告されているものの、そのメカニズムを検証した研究は少なく、学習者によって発話された再話がどのような情報によって構成され、テキスト理解のどの側面にどのような影響を与えるのか、については十分に検証されていない。これまでの先行研究の結果を受け、本論文では以下に挙げる3つの研究を行った。

研究Ⅰでは、再話で産出される情報がどのようなテキスト情報を反映しているかを検証することを目的とし、因果ネットワーク分析を行っている。この分析には、(a) ひとつの情報が他のいくつかの情報と結びついているのかを示す因果コネクションの数と、(b) 情報が因果連鎖上にあるかどうか、の2つの要因を取り入れた。この他にも、読解マテリアルの特徴や産出言語(L1/L2)の影響についても分析を行っている。検証の結果、日本人英語学習者が再話を行う際にテキストの因果構造を反映させていることが示された。この結果から、学習者は読解を行う際に、テキストのどの情報とどの情報が結びついているかを把握しており、このような解析を通じて文章を理解し、さらにそれらの因果構造に関する情報は再話課題を通じてテキスト情報を再構築する際に活用していることが示された。

研究Ⅱでは、再話がどのように読解を促進することに貢献しているのか、そのメカニズムについて検証した。テキストのテーマを操作することによって、大局的一貫性の強度を操作し、再話が大局的一貫性の構築に与える影響について検証した。分析の結果、再話は大局的一貫性の保持にプラスの効果をもたらすことが示された。さらに、テキストの大局的一貫性の強度に関わらず、再話で産出された情報量や情報の質は一定

であることが示された。また、再話課題の有無により読み手の自信やテキストに対する印象に違いが生じており、概して再話を行った読み手の方が自分自身の読みの評価を厳しく行うことが明らかになった。しかしながら、再話による読解の促進は、再話によって読み手の大局的一貫性の保持ではなく構築へ影響した可能性が残されていた。そこで再話群と統制群の両方で、大局的一貫性の構築を促すタスク（テーマを考える）を課し、あらかじめ大局的一貫性の構築を行う状況を設定した場合、両群の文章理解度に違いは生じるのか、についても検証した。実験の結果、そのような統制条件下においても再話群の読解は統制群の読解よりも高いことが明らかとなった。さらに、再話群では統制群よりも読み手が詳細情報に注意をより配分する傾向があることが示された。

研究Ⅲではさらに再話の独自性について検証するために、再話と他の2つのポスト・リーディングタスク（筆記再生課題と要約課題）との比較を行った。ここでは、特に、再話でみられた大局的一貫性の構築に対するプラスの効果が、他の2つのタスクにおいても見られるかに焦点を当てた。検証の結果、読解に与えるプラスの効果は、筆記再生課題よりも再話課題の方が高く、再話課題と要約課題がほぼ同等であることが示された。再話課題と要約課題では、テキストの内容を自分のことばでまとめるという点が共通しており、この点が読解を促進したものと考えられる。一方、筆記再生課題は、できるだけ多くの内容を記憶するということに焦点があてられてしまったため、学習者が注意力を効率よく配分することができなかった可能性がある。

本研究では、因果構造の把握や大局的一貫性の構築に与える再話のプラスの効果、読みの目標によって変化する読解処理の精度や深さ、読み手のメタ認知や読み手による戦略的な読みのコントロール等に焦点を当てることによって、再話が読解に与える効果のメカニズムの解明に光を当てた。一連の研究の結果から、読み手はタスクによって読みの目標を設定し、それが構築される表象の一貫性の保持に対して影響することが分かった。また、再話課題では、文章を知らない人に説明することが求められるため、読み手は普段の読みよりも大局的一貫性だけでなく、より局所的な詳細情報にも注意を配分し、表象を構築していくことが示された。このため、再話課題を目標に行った読解において、構築される表象は通常のものよりも精緻であり、読みのコントロールを普段よりも注意深く行い、読解の処理を深いレベルで行っていることが示唆された。

審査の結果の要旨

本博士論文は、再話課題が日本人英語学習者の読解に与える影響を明らかにすることを目的としている。再話課題は優れた読解指導として海外では広く受け入れられている手法であるが、これまで日本の英語教育においてはあまり活用されてこなかった。本論文は、再話が読解を促進するメカニズムや再話で産出される情報を様々な側面から検証を行うことによって、再話課題が読解に与える影響について理論的な解明を行った。そして、日本人英語学習者に対する読解指導としての再話課題の有効性について議論を行っている。本博士論文の優れている点は、大きく以下の3点にまとめられる。

第1に、本研究において再話課題が読解を促進するメカニズムについて理論的な側面から検証を行っていることが挙げられる。読解指導としての再話課題の効果は幅広く支持されている一方で、従来の研究においては再話課題が読解を促進する理論的背景についてはほとんど明らかにされていなかった。本研究によって再話のメカニズムについて幾つかの側面が明らかとなり、読解指導としての再話課題の有効性に理論的な基盤を見出した点に関して、本博士論文は評価できると考えられる。

第2に、本博士論文の独創性の高さが挙げられる。本博士論文の研究Ⅲにおいて、再話と他の2つの読解後のタスクとの比較を通じて再話課題の持つ性質の検証を行っている。その結果、再話課題を目標とした読解において構築される心的表象は、通常のものよりも精緻であり、再話課題を与えられた学習者は読みのコ

ントロールを普段よりも注意深く行い、読解処理を深いレベルで行っていることなどが示された。このことは、再話課題の特性を示すとともに、再話課題の効果を検証した本博士論文の独創性を支持するものと考えられる。

第3に、本研究において多角的な観点を考慮に入れた分析を行っている点が挙げられる。具体的には、本博士論文においては、再話プロトコルに含まれる情報の性質をテキストに含まれる情報の重要度や再生率、テキストの因果構造等、様々な分析方法を活用しながら分析を行っている。これらの観点は、近年の読解研究において母語話者だけでなく第2言語学習者の読解プロセスに影響を与える重要な要因であることが指摘されているものである。これまで先行研究においては、再話が読解プロセスのどの過程に影響するのかについては十分な検証が行われておらず、本研究は再話が読解を促進する効果について詳細に考察を行っている点は高く評価できるものと考えられる。

しかしながら、本博士論文に残る課題としては大きく以下の2点が挙げられる。第1に、本研究から得られた結果がどの程度一般化できるかについて検討することが必要であると考えられる。すなわち、再話課題のより普遍的な性質について検証することが望まれる。本博士論文においては、(1) 読解マテリアルの難易度を統制しきれていない点、(2) 読解マテリアルを物語文にのみ絞ったため、他の異なるテキストタイプの影響について検証できなかった点、(3) 実験の対象者や数が限られていた点などが課題として残されているものと考えられる。

第2に、博士論文の構成および論展開並びに執筆/論文作成においてさらなる推敲が必要である。特に、リサーチ・デザイン、リサーチ・クエスチョンズ及び実験結果の間の整合性が不十分な点が散見される点については、補足説明が必要であろう。具体的には、再話の効果が学習者の第2言語熟達度のレベルによって影響を受けるのか否かについて、リサーチ・クエスチョンに含めて分析することが望まれる。また、本研究のテーマである「再話が第2言語学習者の読解に与える影響」を直接的に扱っている研究Ⅱ (Exp.3 & Exp.4) と研究Ⅲ (Exp.5 & Exp.6) に焦点を当て、より丁寧な分析及び考察を行うことが必要であったと考えられる。これらの課題を解決することによって、本博士論文の学術的な位置づけを高めることが可能となると同時に、本研究から得られる教育的示唆も一層大きくなるものと考えられる。

こうした一定の課題はあるものの、本論文は「再話というタスクのEFL読解への効果を明らかにする」という外国語/第2言語の学習指導にとって有益なテーマであり、現在注目を集めている task-based language learning/teaching や task in language classroom などと関連のある非常にタイムリーなトピックであると考えられる。そのため、本研究の結果から得られる教育的示唆は極めて重要であり、読解研究への寄与が大きいと評価できる。

平成24年1月27日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。